

ロシア 東欧 経済速報

社団法人 ロシア東欧貿易会 東京都中央区新川1-2-12 金山ビル 郵便番号104 電話 (3551) 6215~9
ロシア東欧経済研究所 [購読料・送料共前納 1ヶ月-1,500円 1ヶ年-18,000円]

1997年(平成9年)4月15日 No. 1054

目次

| | |
|------------------------------|----|
| キーパーソン スペシャル | |
| ロシアの政府刷新でせめぎあう2つの潮流……………服部倫卓 | 1 |
| ——二転三転した改造劇の裏側—— | |
| 統計速報…………… | 14 |
| ロシアの石油会社別の原油産出量/14 | |

ロシアの政府刷新でせめぎあう2つの潮流

——二転三転した改造劇の裏側——

要旨

1. 本稿では、3月から4月にかけて進められたロシアの政府改造の経過を跡づけ、その結果成立した刷新内閣の陣容を紹介する。とくに、チェルノムイルジン首相とチュバイス新第一副首相の間で繰り広げられた激しい主導権争いを中心にみていく。
2. 過去数カ月、ロシア政治は妥協路線のもとで相対的な安定を享受してきたが、その代償として政策的手詰まりと社会・経済状況の悪化が進行した。今回の改造策は、この状況を打開するために政府の組織・活動原則を一新することをそもそもの目的としていた。
3. 政府改造をめぐる、産業派・部門主義者と、マクロ経済派・機能主義者という2つの潮流がせめぎあった。そして、その潮流をそれぞれ体現するチェルノムイルジン(私見では本来同氏自身は政策的に中立に近い)とチュバイスが火花をちらし、次第に両者の個人的な抗争という様相を深めた。3月の段階では何とか踏みとどまったチェルノムイルジンも、4月に入って相次いで自派の閣僚を失い、政権内の立場が弱体化した。当初の構想よりも後退したとはいえ、チュバイスが主導権を握る政府がほぼ完成した。
4. 同時に、今回の政府改造の過程で、チュバイスはその路線を貫徹するのが容易でない現実も浮かび上がった。ネムツォフという異質なファクターの登場もその一例である。今後の状況次第で、より無難なチェルノムイルジンに再び出番が回ってくる可能性は決して低くない。